

研究ノート

看護大学生による道東根室圏域の 体験学習からの学びと効果

—地方・過疎地における医療の課題を見据えて—

Learning and Effects of the Practices Experienced by Nursing Students
Throughout the Local Experience of Eastern Hokkaido Nemuro Areas,
The Viewpoints of Medical Issues in Rural and Depopulated Areas

泉澤真紀¹⁾ 栗田克実²⁾

Maki IZUMISAWA and Katsumi KURITA

¹⁾ 旭川大学保健福祉学部保健看護学科

²⁾ 旭川大学保健福祉学部コミュニティ福祉学科

キーワード：医療，看護，体験学習，過疎地域，根室圏域

抄 録

少子高齢社会を迎え、『新たな医療のあり方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン』（厚生労働省，2017）から，これからの社会経済環境の変化に対応できる医療職の働き方が検討されている。特に医療の疲弊と衰退は，特に地方や過疎地域（以下，地方）深刻な問題でありその対策が急がれ，そこにおける看護師の役割も見逃してはならない。本研究は，学生時代の様々な経験が将来の看護師像に影響を与えるとした先行研究から，2018年8月道東根室圏域への2泊3日の見学及び体験を伴う自主参加による体験学習を実施，その後本企画に賛同した看護大学生2年生5名の体験を半構造的フォーカス・グループ・インタビューで得た内容を質的に分析した。逐語録より158のコードを抽出，そのうち看護学生の感じ取った内容に係る109コードを研究の対象とした。その結果，【地方は不便で劣ったイメージ】【不意な契機から地方に興味・関心が突起される】【地方や地域の実態がみえ考えはじめる】【都市の医療を求め土地を離れる人々がいる】【地方の医療の衰退に気づく】【地方を知ってもらい対策を共に考える】の6カテゴリーが抽出され，地方における体験学習の効果から，地方医療への課題を考察した。本研究は大学倫理委員会の承認を得て実施した。

I. 緒 言

北海道における看護師就業率（人口10万人対）を全国と比較すると20%と高い¹⁾が，その就業人口のほとんどが大都市札幌に集中している。広大な土地を有している北海道の地方の看護師就業数はかなり深刻である。特に道東根室圏域は，全道の面積割合に比して人口は少なく，同時に看護師数も全道より大きく下回っており看護師不足は著しく深刻である²⁾。また北国という豪雪地帯に加え，大都市より300kmも離れた地方・へき地にある根室圏域は，交通の不便さや交通

網の不利のため，二次医療機関でさえアクセスが非常に悪く，医療施設への搬送の時間制約というリスクを負う地域でもある。この地域における医療の担い手としての看護師不足は，医療の公平性でも多くの問題を抱えている。看護大学及び看護専門学校卒業者の希望の就職先は，新人教育の充実している大規模施設が望まれており³⁾，卒後教育体制が整備されにくい地方・過疎地（以下，地方）を望まない傾向がある。また多様な症例や特殊な専門性を活かした看護が経験できないという点からも，地方就業は第一選択肢とはなっていない。その一方で，地方に就業している看護師の就業

の理由の一つに奨学金の貸与による就業制約があったが、そのような対策を講じても、いまだ看護師数減少の解消や定着には至っていない⁴⁾。

このような中で、地方・過疎地域（以下、地方）へ少しでも目線が向けられるよう様々な実践報告があった。学生時代にへき地医療に関する授業⁵⁾、離島看護へのインターシッププログラムへの参加⁶⁾や、実習経験を通じた地域医療の経験⁷⁾があり、いずれも地域利用に関する看護学生の興味・関心を向上させることがわかっていた。このような地方や過疎地に学生を引率し研修をする取り組みは、これまで社会学や福祉学において盛んにおこなわれ⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。医療系とりわけ看護の分野においては、看護学生の地域医療についての学び¹¹⁾や、在宅医療への流れを汲んだ診療所実習での学び¹²⁾があり、さらに近年の傾向としては、IPE（多職種間連携教育）とした地域医療における多職種間連携

教育が行われるようになった¹³⁾。しかしながらこれらは学生の学びの体験が重視されており、地域医療の現状改善への提言には至っていなかった。そこで本体験学習は、「看護学生時代に地域・過疎地域を広く知ってもらうことは、地方・過疎地への関心と理解につながる」¹⁴⁾とした先行研究から実際に現地に出向くことを通して、地方医療を考える動機にできないかと企画した。またこのようなリアルな体験が、現行カリキュラム上皆無であることから、地方医療の課題解決の糸口が見つけられるのではないかと期待された。これまで、地方における看護大学生の体験の学びをまとめた研究は少ない。そこで本研究では、地方に関心を持つ看護大学生が、研修体験を通じた経験の内容を記述することで、新たな地方医療の課題を検討しようと考えた。

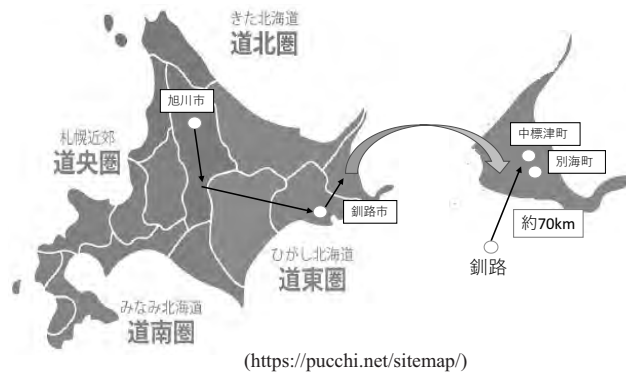


図1 体験学習を実施した地域（中標津町・別海町）の所在地

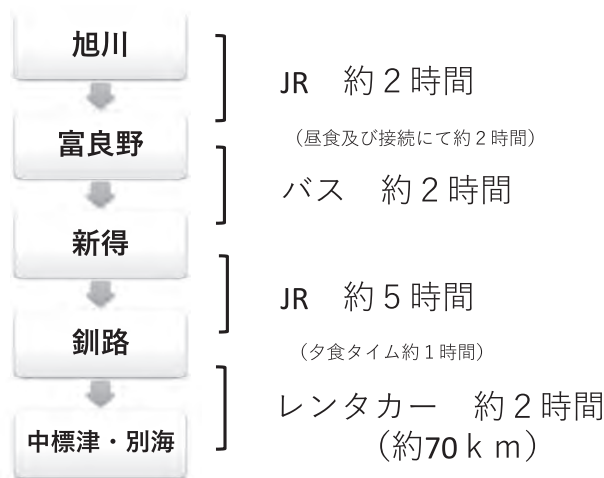


図2 中標津町・別海町までの交通手段

Ⅱ. 研究 方 法

1. **対象者**：8月中旬地方体験学習（以下、体験学習）を経験した看護学生2年生5名
2. **調査方法**：フォーカス・グループ・インタビューにおける半構造的面接法
3. **調査期間**：2018年9月（体験学習終了約1か月後）
4. **調査内容**：①現地でどのような体験をしたか、②体験で一番印象に残っていること、③体験前後で考えていたイメージについて違い、④地方における保健医療福祉についての課題、の4項目
5. **データ分析方法**：質的帰納的分析。インタビューで得られた内容を逐語録にまとめ、その後、主語と述語が一文となるような意味まとまりとして区切りデータ化した。データの取舍選択に当たって、地方について、体験学習の内容、学生の気づき、地方医療の課題に関するデータについて採用した。その後意味の類似するものをまとめコード化した。その後全体を俯瞰し内容を文章化した。作業にあたっては、各々分野の違う立場（看護教育・福祉教育・地域の保健師・地方勤務看護師）の4人で、段階・区切りごとに協議し進め妥当性の確認を行った。
6. **用語の定義**
 - 1) 道東根室圏域：北海道道東に位置し、根室市、中標津町、別海町、標津町、羅臼町の1市4町からなる地域（図1）。道内の中核都市から隔離され、圏域の中核となる5病院すべてが199床以下（1診療所を加え平均98床）で、高度急性期医療機能を持っていない。道内稀代の医療の過疎地域で、慢性的な医師・看護師不足に悩む地域である¹⁵⁾。また圏域に看護師養成施設がなく、看護師の養成を外部地域に頼らざるを得ない地域である。
 - 2) 地方・過疎地：厚生労働省で定義されている「へき地」と同義語とする。
 - 3) 体験学習：看護カリキュラムと別に学生主体の任意参加（自費）による地方を巡る2泊3日の現地研修（図2）。2018年8月の夏休みを利用し看護学生5名が参加、教員1名が引率。体験内容は、地方医療施設見学、本圏域で就業する卒業生との交流等で

ある。

7. **倫理的配慮**：旭川大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（2018年；承認番号12）。対象者には口頭と紙面にて任意性、自由参加、協力の有無は成績に関係しないことを説明し同意を得て実施した。また研究参加への思いが束縛されず自由に意見が述べられるよう、対象学生に教育面に直接関わらない第三者がファシリテーターとなりインタビュー調査を実施し、かつ成績への影響が回避できるよう前期の成績が確定後に実施した。

Ⅲ. 研究 結 果

対象者は看護大学生2年生5名で、うち4名は地方と関連のない中核都市の出身者であった。インタビュー調査で収集した内容を逐語録にまとめた。その結果158のコードを抽出され、そのうち学生の気づきと学びに関わる109コードを研究の対象とした。109のコードはさらに、49、19のサブカテゴリーに、最終的に6コアカテゴリーに集約された。コアカテゴリーは、【地方は不便で劣ったイメージ】【不意な契機から地方に興味・関心が突起される】【地方や地域の実態がみえ考えはじめる】【都市の医療を求め土地を離れる人々がいる】【地方医療の衰退に気づく】【地方を知ってもらい対策をともに考える】である。なお、カテゴリーは【 】, コードは「 」で示す。

1. フィーカスグループインタビューから得た内容

- 1) 【地方は不便で劣ったイメージ】25コード：旭川から「JRとかバスで1日かかる」と地方という場所は距離が遠く「交通の便が不便」であり、「そういう面ではやっぱりちょっと遅れているっていった」「なんかちょっと田舎ばかにしていたな」というように、都会と比較して田舎であり劣っているイメージがあった。「どんな所とかすらも全然わかっていなかった」「そもそも知らないから選択肢には入っていない」と、知らないがために勝手な思い込みでイメージを作り上げていた。
- 2) 【不意な契機から地方に興味・関心が突起される】10コード：「病院を見て温ったか味があるというか」「牛の数が（人口より）多い」と地元独自の特色を見出し、「先生に人数集めてって言われて、仲の良い人を誘ったら“いいよ”って言ってくれて」「大きな病院しか言ったことがなかったので、タイミング

よく体験してみようかな」というように、きっかけによって視野も拡大し地元以外の地域にも興味・関心が生まれていた。

- 3) 【地方や地域の実態がみえ考えはじめる】20 コード：体験を通して、「ほんとすごい看護師も医師も手厚いサポートだなんていう印象」「どっかに連絡したら紹介してくれて…すごい協力的で」「救急車搬入口は一生懸命（雪道を）除雪したりとか、看護師の方が。みんなでやる（助け合う）みたいな感じで」と地方の人の温かさに触れながら、「看護師さんの行動とか、病院のお医者さんのどういう風に関わっているのかとか、病院の雰囲気とかそういうのを感じて」と、その関わり方の様子を見て、住み続ける人々の暮らしや近い関係の中で生まれる協力や助け合いをみて考えはじめていた。
- 4) 【都市の医療を求め土地を離れる人々がいる】18 コード：「(先輩に) 奨学金を払い終わった後どうするんですかって聞いたたら、おつきい病院に行きたいかなという人もいて」「医療的な面でやっぱり都市部のほうが充実した医療を提供できるとかでそっちに転院してしまうとかで人口がどんどん減ってしまうみたいで」と、地元の就業確保に関する奨学金もあまり功を奏さず、また地方の人々も充実した医療を求めて都会の大きな病院に流れていく実情を知り、益々過疎化していく現状を目の当たりにしていた。
- 5) 【地方医療の衰退に気づく】25 コード：地方の医療は、特に北海道の豪雪を含め、交通の便の悪さに人手不足が加わることで困難がある。「病院自体とか、…閉鎖しているような感じの、ちょっと暗い感じなのが多かったの、やっぱり人が足りていないのかな」「何を言っても交通の不便さ“交通の便が

もう少し良ければやっぱり生きられる命がある”というのをおしゃって」と、過疎地域に対する地方医療の衰退を肌身で感じていた。「距離的な問題があつて手が回らなくて、結局家族で頑張るしかないという状況が往々にしてある」と、病院はあつても退院後の受け皿がないため、家族の負担がかかっている現状も地方の課題であることを知り、地方医療の衰退について知るきっかけとなった。

- 6) 【地方を知ってもらい対策をとともに考える】11 コード：地方の状況は見聞きして体験してみないとわからない。「やっぱり行ってみて感じることで、なんか印象が変わったりするので」「私自身もそうだったのでですけど、実際に見てここういういい場所なんだというのを多くの人にわかってもらえば」など、地方ではない外部からの視点で見つめ考える重要性に加え、「他の地域からもA町はこういう場所なんだともっとアピールしていけば来たいなという人ももっと増えるかな」と語り、今とは違うアピールの仕方でもっと地方を知ってもらうような対策を考える契機となっていた。

2. 道東根室圏域の過疎地域の医療・看護の倫理的問題（全体を概観）

以上6カテゴリーを俯瞰して全体像を示す（図3）。看護学生は当初、【地方は田舎で劣ったイメージ】をもち、自分たち自ら考えるきっかけは持ち得ていなかった。しかしながら、教員の勧誘という偶然のきっかけや友人の誘いからなど【不意な契機から地方に興味・関心が突起される】ようになる。このような契機に働きかけないと地方を知る動機にはつなげていかない。しかしふとしたきっかけから、実際に見聞きし体

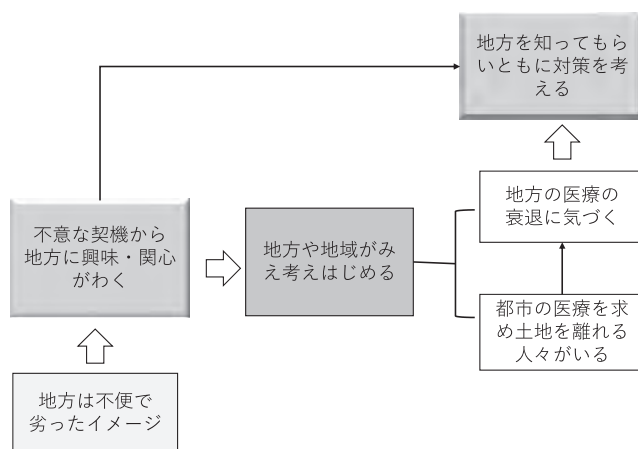


図3 6カテゴリーを関連させた概念図

験をすることを通じて、地方に関心を寄せることができ【地方や地域がみえ考えはじめる】契機となった。さらに見聞きした現場の声、すなわち【都市の医療を求め土地を離れる人がいる】現状から、【地方の医療の衰退に気づく】ことになる。深く地方の医療体制を考えるきっかけを与えられ、最後には【地方を知ってもらい対策を共に考える】というような行動変容を起こそうとする動機の芽生えとなった。すなわち、このような体験を通じてからこそ、自分の身として感じることを通して、興味・関心を発展させ思考を巡らせることができた。

VI. 考 察

地方における看護師をはじめとする医療者不足は、そこに生活人々の健康水準、ひいては生活をも脅かす深刻な問題である。このような少子高齢化に伴う地方の衰退に対し、国や都道府県、市町村単位で対策を講じてはいるものの、国全体が静かにゆっくりとその進行を見守っているのが現状である。とりわけこの根室圏域の看護師の就業率は北海道内でも最も低く、さらに圏域に看護師養成施設がなく人材養成を他の地域へ依頼せざるをえないことは、ことさら看護師の地元定着を困難にしている。施設においては奨学金制度や積極的な実習の受け入れを行なっているもののその解消に至る道のりは長く、ますます人員の地域格差に歯止めがかからない。このような中、看護学生の体験学習を通じて地方のおかれている状況を考えた。

本体験学習は、地方で就業している看護師の「都会なら助かっていた命、もっと看護師がいれば…」¹⁶⁾という切なる地方の声を発端にはじめられた。インタビューをする中でわかってきたことは、そもそも都会育ちの学生たちにとって、地方が抱える問題としてある地方の医療は机上の空論でしかなく、その深刻さを肌身で感じることは皆無であることである。看護学生の実習先の多くは、教育環境の整った医療施設がほとんどであり、あえて遠い地方の施設を実習施設に選択しないことや、看護教育課程の中でそのことを教えられないことがないことから、その理解を難しくしている。人々の生活やその土地の産業構造などから発生する疾病構造といった人々の暮らしを考えることのできる幅広い視野をもつことや、地域格差や医療の平等性といった倫理的な視点を持つことも、現行の看護教育ではなかなか担保が難しい。

まず地方・過疎地について、都会に育つ学生の視野

には地方という概念がないということである。授業で地方について学んでいても、それは自分たちには関わりのない出来事であり、またあえてそこに就業なども考えない土地である。例えば偶然に親戚や友人が地方に住んでいること等があれば、その理解はまた違うであろうが、しかしながら自ら地方について自分の視野に入れることはないことがわかった。このように視野にない理由から、独りよがりな想像でイメージ抱いていた。今回、「このような体験がなければ、一生このような地方を知ることすらなかった」と語り、この偶然による必然な出会いが、学生の経験をより一層豊かにしていくことがわかった。当初は「友達に誘われて」といった安易な動機ではあったが、些細な偶然から得られた現場に飛び込んでいく経験を、学生時代から体験できる機会を増やすことは、とても重要な意味を持つと考える。地方への理解は、閉鎖的はイメージの打破からはじめなければいけないと考えた。

最初は肯定的とは言えなかった地方に対するイメージは、学生は「みんなで（協力して）やみたいな感じで」とを助け合う様子を見聞きし「雰囲気として温ったかいなという感じ」だと語っていた。また地方の人々と触れ合い話を聞き交流することで、地方の人々の温かさに触れることを通して、その独特な雰囲気や地方独自の魅力を感じ、地方に対してのこれまでのイメージが払拭されていき、地方に興味・関心が引き出されてきた。吉峰らは、過疎地の医療や暮らしを知らない若者が実際の体験をすることで地域医療に興味を引き出す¹⁷⁾として、体験学習が地方医療を知る糸口にあることを示唆している。このような早期体験実習の必要性は医学教育からはじまり、看護分野にも浸透している¹⁸⁾¹⁹⁾。このような興味・関心を引き出す体験学習の効果が期待できる。

次に、本体験学習を通じて学生の興味・関心は、現場の声を聴くことを通じ地方における現状を自分に引き寄せ考えるきっかけとなっていた。例えば、都市から「派遣されてくる医師によって診療が行われている」こと、「暗い感じがする」といった病床が閉鎖されている現状、人が足りていない現状、少し難しい医療が必要となれば「この土地を離れなければならない人々がいる」こと等、一番近い中核都市との移動における距離感、交通の不便さや困難さを身をもって感じることを通して、地方における医療の実態を知ることにつながっていた。「私自身もそうだったんですけど、実際に見てこういういい場所なんだということを多くの人にわかってもらえれば」「他の地域からも…もっと

アピールしていけば“来たいな”という人ももっと増えるかなと」と、この地方をもっと知ってもらうことによって何かの対策を考えられるかもしれないと語っている。このように現場の医療衰退の現状を体感することを通して、自分たちに何かできないかと気づくことにつながっていた。

歯止めがかからぬ地方の医療の衰退に、看護教育として今何ができるのか。現場体験を通じた学生の語りから見てきたことは、そもそもこのような現状を知らない学生に、まず知ってもらうことから始める必要があると考える。地方の医療衰退を医療職の人員の確保という点から考えたとき、そのための人員確保対策や就業斡旋も一つの方法と考えるが、それよりもなお、このような現状があることを看護学生が身をもって自分の目に映しながら体感することが大切であると考える。都会にない地方の持つアイデンティティに関心が注がれることにより、また少しずつ地方に目を向けることができていることを通して、地方のおかれる現状を考えはじめるのではないだろうか。そこに少しでも地方に対する愛着が感じられるようになれば、行動が伴う関心が変わっていくのではないかと考える。このように長期的な展望に立ち、看護学生の視野を広げる方略を考えていくことも、地方の現状と課題を少しでも解決できる糸口や契機が期待できるのではないかと考える。「看護学生時代の体験は、看護師としての視野を広げ新たなビジョンを形作り自分のなりたい看護への夢を具現化できる経験となっている」²⁰⁾というように、都会出身の学生のその土地に対し、他と違う特別な感情や思い入れが感じられる経験の必要性が示唆された。

今回のインタビューでは、地方に対する看護学生が感じ取った内容から見える現状把握にとどまった。しかしながら地方における医療体制の課題は山積している。近年における社会の保健医療福祉体制は、地域包括支援体制から地域共生社会にシフトし、2022年施行の改正看護カリキュラムの中でも、より一層地域志向が色濃くなってきている。このような地方の格差の問題も含めて、社会全体が“だれも残さない”重層的な支援体制への構築が望まれている。今回のようなカリキュラムにない活動は、インフォーマルな活動ではあるが、ますますそういった柔軟で関わろうとする意志の高い活動は重要になってきており、多様化多重化する社会の問題の解決への一助となり得るのではないかと考える。

Ⅶ. 結 語

看護大学生が道東根室圏域の地方の体験学習を通して感じ取ったことは、【地方は不便で劣ったイメージ】【不意な契機から地方に興味・関心が突起される】【地方や地域の実態がみえ考えはじめる】【都市の医療を求め土地を離れる人々がいる】【地方医療の衰退に気づく】【地方を知ってもらい対策をともに考える】の6カテゴリーに集約された。本結果から、看護学生は体験を通じて改めて医療の課題を考えるきっかけを得ていた。

本調査にあたり、ご協力下さいました町立中標津病院、町立別海病院の皆様、根室圏域で働く卒業生、協力して下さった学生の皆様、そして本研究にご協力いただきました町立別海病院山崎陽弘様、元保健看護学科教員宮部洋子様へ感謝いたします。

また本研究は、2017～2018年の2年間、旭川大学地域研究所共同研究プロジェクトの助成費をうけ実施した研究の一部であり、2019年第13回日本看護倫理学会年次大会で発表したものの一部を加筆・修正したものである。

文 献

- 1) 厚生労働省 (2018). 平成30年衛生行政報告例(就業医療関係者)の概況, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw-eisei/18/dl/kekka1.pdf> (2021年12月31日閲覧)
- 2) 厚生労働省 (2011). 釧路・根室圏地域医療再生計画, <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iscikyoku/0000095138.pdf> (2021年12月31日閲覧)
- 3) 村上和正, 長谷部佳子, 廣橋容子, 岩坂信子, 森田静江, 平野智美他: 道北地域の中規模病院に看護学生が就職選択を決定する要因—臨地実習評価との関連から, 名寄市病誌, 24 (1), 24-28, 2016.
- 4) 泉澤真紀, 山崎陽弘: 地方・過疎地域出身者が看護師養成学校卒業後に就業を決める動機と理由, 日本看護教育学会誌第28回学術集会プログラム・演題集, 131, 2018.
- 5) 伊藤有香, 大竹まり子, 赤間明子, 鈴木育子, 小林淳子, 細谷たき子他: 看護系大学におけるへき地医療の授業と学生のイメージに関する研究, 山形公衆衛生学会, 35, 67-68, 2009.
- 6) 山澄直美, 稗圃砂千子, 大重育美, 山崎不二子: 離島看護の魅力伝えるインターンシッププログラムの開発, 長崎大学栄養学部紀要, 13, 27-39, 2015.
- 7) 水主千鶴子, 山本明弘: 看護学生の地域医療についての学び—2日間の病院実習から, 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 4 (3), 91-98, 2008.
- 8) 塩川幸子, 藤井智子, 栗田克実: 都市部の過疎地域における住民ニーズ調査(第2報)—住民の子育てに対する意

- 識と大学生の訪問調査の学び, 北海道地域福祉研究, 19 (3), 106-115, 2016.
- 9) 跡部嵩幸, 後藤春彦, 遊佐敏彦, 山崎義人: 学生を対象とした都市・農村交流の継続に関する研究—山梨県早川町を事例として, 日本都市計画学会都市計画論文集, 44 (3), 595-600, 2009.
- 10) 村井俊博, 塩田英樹: 地域活性化と学生ボランティアの活動—大麻市民夏祭りの活動を通して, 北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要, 2 (2), 37-50, 2002.
- 11) 同掲書 7)
- 12) 栗本一美, 八木一江: 診療所実習前の講義における看護学生の学びと今後の課題, 新見公立大学紀要, 31, 79-86, 2010.
- 13) 三浦早紀, 小林修, 山下正和, 藤橋雄一郎, 吉村学: 地域医療臨床現場での多職種間連携教育の取り組み, 第50回日本理学療法学会大会抄録集, 2015.
- 14) 泉澤真紀, 山崎陽弘, 宮部洋子: 地方・過疎地域に新卒で就業する看護師の現状と課題—奨学金を受けてへき地同党根室圏域で働く看護師事情, 旭川大学地域研究所, 40, 91-103, 2018.
- 15) 同掲書, 2)
- 16) 泉澤真紀, 山崎陽弘, 佐々木萌衣, 野々村栞里, 瀬戸口遥他: 地域を学ぶアーリーエクスポージャーの役割—看護学生が過疎地域の道東根室地域をみて聴いて感じたこと, 看護教育, 61 (8), 462-469, 2020.
- 17) 吉嶺文俊, 原勝人: 診療場面毎の課題と実践—過疎地の地域医療の課題と実践, 日本内科学会, 106 (6), 1151-1158, 2017.
- 18) 藤代和美, 小林淳子, 渡部光恵: 看護学教育における早期体験実習での学習内容に関する文献レビュー, 四国大学紀要, 46, 183-189, 2016.
- 19) 早川真奈美, 古田雅俊, 中村恵子: 早期体験実習の意義に関する文献検討, 中央学院大学看護学部紀要, 6 (1), 49-62, 2016.
- 20) 同掲書 14)